

くものいと No. 41

KUMO NO ITO

November 23, 2008

関西クモ研究会

くものいと No. 41 (November 2008)

- 謎の仔グモの正体 吉田 真 . . . 1
仔グモの同定の重要性 吉田 真 . . . 3
同定指南 コモリグモ Lycosidae (その4) — *Pirata* 属 — 田中穂積 . . . 8
オオジョロウグモ幼体の不思議な迷網 新海 明 . . . 13
ウロコアシナガグモの紫外線写真 関根幹夫 . . . 17
マルゴミグモの観察で分かったこと 船曳和代 . . . 19
採集品中に見られたクモ3種の奇形 池田勇介 . . . 23
ライバルよ、頑張れ 池田幸二 . . . 24
ライバル???おっさんこそ頑張れ 池田勇介 . . . 28
書評 クモの網 — What a wonderful web! (INAX 出版) 吉田 真 . . . 28
長野のサカグチトリノフンダマシ 小池直樹 . . . 30
樹の上のワスレナグモ 荒川 真子 . . . 30
関西クモ研究会 2007 年度会計報告 . . . 32
2007 年度例会の記録 . . . 33

くものいと 第41号

発行 2008年11月23日

関西クモ研究会

謎の仔グモの正体

吉田 真

前号(吉田 2007)で報告したように,滋賀県大津市の龍谷の森では,2005年3月21日にワクドツキジグモのオス成体が社本吉正さん(当時立命館大学学生)によって採集されていた(図1)。しかし,筆者らが2004年からこの森でかなり頻繁に採集を行っているにもかかわらず,この一頭以外にワクドツキジグモの成体も幼体も見つかっていない。この種は稀産種ではあるが,幼体は成体よりも数が多く,生息密度も高いはずなので,成体が見つかった場所で幼体が見つかる確率は高いと推測される。

そこで筆者は,龍谷の森で採集されている所属不明の仔グモのうち,ワクドツキジグモに似ているもの(図2)がその仔グモではないかと考え,谷川明男さんにDNA分析をやっていただくことにした。

その結果,残念なことに,この仔グモはアカイロトリノフンダマシであることが判明した。龍谷の森では,これによく似た茶色っぽい仔グモが取れているが,それはシロオビトリノフンダマシであるという。また,



図1 ワクドツキジグモのオス成体

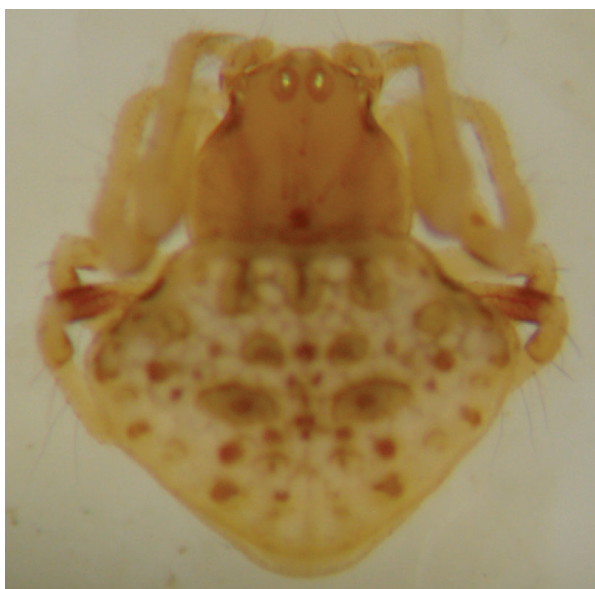


図2 謎の仔グモ, 体長1mm程度

これとは別に、池田勇介君らが大阪府茨木市の阿武山で採集したものは、オオトリノフンダマシの仔グモだという。

しかし、ワクドツキジグモの幼体は何故採集されないのだろうか？それは、幼体の生息密度が極めて低いためとも考えられる。残念ながら採集されていなかったが、出のうした 2 令がオス成体より小さいなら、幼体は今後頑張れば採集可能かもしれない。しかし、オス成体は体長 2 ミリほどなので、ひょっとすると卵のう内で脱皮して出のうした時点（二令）で成体になっているのかもしれない。もしそうなら、オスの幼体はそもそもいないということになる。メス成体の体長は 8-10 ミリほど（新海 2006）なので幼体はいるはずだが、2 令で 2 ミリ程度ならオス成体と同じ程度に採集が難しいことになる。須賀瑛文さんが愛知県犬山市で 2004 年 6 月 1 日に採集された 2 ミリほどの幼体（前号参照）は、たぶんワクドツキジグモのメス幼体であろう。

別の可能性も考えられる。それは、ワクドツキジグモの幼体が成体とは似ても似つかぬ形をしているために採集されているのに見逃されている、というものである。

ワクドツキジグモの幼体を採集することはできなかったが、副産物はあった。それは、DNA 分析の結果、アカイトトリノフンダマシ、オオトリノフンダマシ、シロオビトリノフンダマシの幼体が判明したことである。幼体の段階でもクモの種名が同定できれば、各地のクモファウナやさまざまな生息場所でのクモ多様性を明らかにする上で、非常に役に立つと思われる。

引用文献

新海栄一 2006. ネイチャーガイド「日本のクモ」.336 p.文一総合出版.

吉田 真 2007. 龍谷の森のワクドツキジグモ (*Pasilobus hupingensis*) .くものいと, 40 : 26-31.

仔グモの同定の重要性

吉田 真

ビーティングで採集されるクモの多くは幼体（仔グモ）であり，幼体が全体の 9 割を超えることもまれではない。これらの幼体の種名が同定できれば，その場所のクモ・ファウナを明らかにする上で非常に役立つに違いない。筆者は，滋賀県大津市の龍谷の森で，2004 年から 2 年間，ほぼ毎月採集を行った。その結果から，仔グモでも同定できる例をここで示すことにする。

1) トリノフンダマシ類

龍谷の森ではトリノフン系系の幼体が採集されている（図 1，2）。しかし，龍谷の森ではトリノフンダマシ類（トリノフンダマシ，オオトリノフンダマシ，アカイロトリノフンダマシ，シロオビトリノフンダマシ）の成体またはそれと分かる幼体は採集されていない。この森には開けた草地もなく，トリノフンダマシ類が生息する環境とはそもそも思えない場所である。この森でワクドツキジグモのオスの成体が取れているので，筆者はこれらがワクドツキジグモの幼体ではないかと思いい，谷川明男さんに DNA 分析を依頼した。その結果，残念ながらワクドツキジグモではなく，白っぽい幼体（図 1）がアカイロトリノフンダマシ，茶色っぽい幼体（図 2）がシロオビトリノフンダマシであ



図 1. 謎の幼体 1.体長 1mm 強

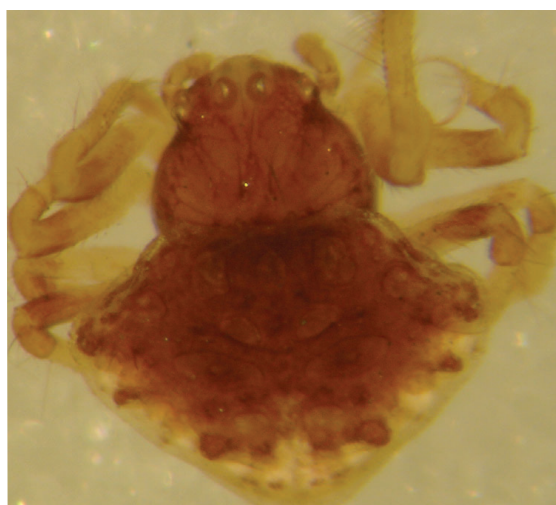


図 2. 謎の幼体 2.体長 1mm 強.

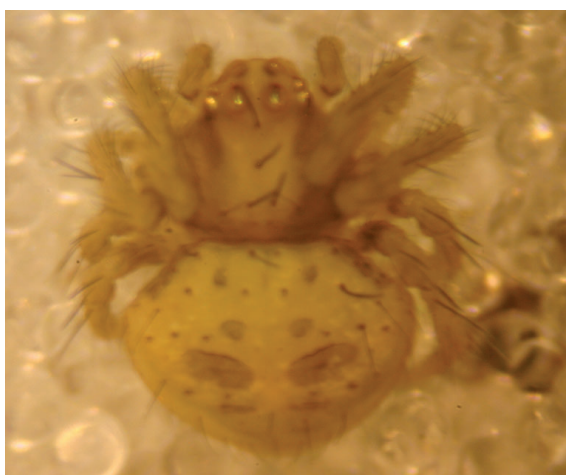


図 3. 謎の幼体 3.体長 1mm 強

ることが分かった。龍谷の森では、これらの成体や一見してアカイトリノフンダマシやシロオギトリノフンダマシと分かるような大型の幼体は取れていない。これは、この森がトリノフンダマシ類の本来の生息場所ではないことを示している。そのような場所でも小型の幼体が採集されたことは、繁殖場所である林縁の草地などからこれらが

移動してきたことを示唆している。

これとは別に、池田勇介君らが大阪府茨木市の阿武山で採集した薄茶色のもの（図 3）は、オオトリノフンダマシの仔グモだという。筆者はこれとおなじものを京都市左京区大原で採集している。これらはいずれも、体長 1 ミリ強の仔グモである。

2) ツリガネヒメグモとカグヤヒメグモ

龍谷の森にはツリガネヒメグモとカグヤヒメグモが多数生息している。これらは、成体での区別は容易だが、幼体の段階でも区別できるであろうか？

ツリガネヒメグモの特徴

吉田哉さんは「日本産ヒメグモ科総説」で、ツリガネヒメグモの「地色は暗褐色。歩脚に褐色の環がある。第 4 脛節末端の黒環が目立つ。腹部には横に連なる白斑がある。」と述べている（吉田 2003）。

この記述がどの程度、種の同定に役立つであろうか？ツリガネヒメグモのメス成体 2 頭の写真を見てみよう（図 4, 5）。図 4 で目立つのは、まず第 4 脛節末端の黒環である。腹部には「横に連なる白斑」というよりも、斜めに走る白っぽい線が見える。

図 5 は小型のメスである。この個体では、腹部の上部は黒っぽく、その下に白っぽい「横に連なる白斑」があり、末端は黒っぽい。頭胸部は、この個体では暗褐色であるのに対して、図 4 の大型の個体では赤褐色である。図 6 はオスの幼体であり、腹部の色彩パターンは小型



図 4. ツリガネヒメグモ成体
体長 3.2mm



図 5. ツリガネヒメグモ成体
体長 2.3mm



図 6. 幼体. 1.6mm



図 7. ツリガネヒメグモ下面
体長 2.3mm

のメス（図 5）に似ている。

同定に役立つ、他の色彩パターンはあるだろうか？図 7 は小型のメスの下面である。胸板は中央が淡色で、縁が黒っぽい。腹部下面は全体に黒っぽく、糸疣の周りが黒い。そして、一対の白点が目立つ。図 8 はオス幼体の下面であり、小型のメスのそれとよく似ている。このようにみると、ツリガネヒメグモの幼体は、①腹部背面の色彩



図 8. ツリガネヒメグモ幼体
下面. 体長 1.6mm

パターン (図 5, 6), ②胸板の縁が黒いこと (図 7, 8), および③腹部下面の一对の白点と糸疣周囲の黒環 (図 7, 8) によって, 同定可能と思われる。

カグヤヒメグモの特徴

吉田哉さんによると, カグヤヒメグモの特徴は, 「背甲および胸板は黒褐色。(中略) 腿節に縦の黒い線: 腿節, 膝節, 脛節および蹠節の末端, 脛節および蹠節の中央に黒い環がある。腹部は暗い灰褐色で白点と黒斑がある。糸疣の周りは黒い環となる。」(吉田, 2003)。

図 9 は色が薄く大型の個体で, 背甲は黒褐色ではなく赤褐色である。また, 腹部は暗い灰褐色ではなく, 薄茶色である。腹部中央には褐色の縦筋があり, その両側は白っぽい。もっと小さいメス成体 (体長 4 ミリ。図なし。) では腹部中央に暗色の縦筋がある点では図 9 の個体と同じだが, 腹部全体がもっと黒っぽく, 模様もかなり違う。このよ



図 9. カグヤヒメグモ, メス成体
体長 6.5mm



図 10. カグヤヒメグモ幼体
体長 1.5mm



図 11. カグヤヒメグモ下面
体長 6.5mm



図 12. カグヤヒメグモ幼体下面

うに、腹部の色彩パターンには成体でもかなりの個体変異がある。

幼体にも、腹部中央に暗色の縦筋があるが、腹部はもっと淡色で、その色彩パターンは成体とかなり異なり（図 10）、腹部の色彩パターンだけで幼体を同定するのは難しい。

次に、成体の腹部下面（図 11）を見てみよう。糸疣の周囲が暗褐色であることがまず目立つ。それから、外雌器と糸疣の間が白っぽく、その白っぽい部分が褐色の部分で上下に分けられていることである。もっと小さいメス成体（体長 4 ミリ。図なし。）では、全体がもっと黒っぽいが、①糸疣の周囲が暗褐色である②外雌器と糸疣の間が白っぽく、その白っぽい部分が褐色の部分で上下に分けられていること点は共通している。

図 12 は幼体の下面である。図 11 と写真の角度が違うので見にくいだが、①糸疣の周囲が暗褐色である②外雌器と糸疣の間が白っぽく、その白っぽい部分が褐色の部分で上下に分けられていること点は共通している。幼体では、糸疣に近い白っぽい部分是一对の白斑となり、外雌器（予定部分）に近い白っぽい部分是一对の白点となっている。なお、幼体では胸板の縁に黒点が並ぶ（図 12）。

これら以外にも、同じ場所で通年採集すれば、所属不明の幼体でもその成体が分かってくることは良くある。これらのデータを積み重ねれば、各地のクモファウナの解明に役立つことは間違いない。

引用文献

吉田 哉 2003. 日本産ヒメグモ科総説. 日本蜘蛛学会. 223pp.

同定指南

コモリグモ Lycosidae (その 4)

—*Pirata* 属—

田中 穂積

ここ数年, 本誌“くものいと”に同定指南として, コモリグモ科の
数属について書いてきた。*Pirata* 属についてはかなり前に一度発表し
ている (Atypus (65), 1975) が, その後の時間の経過や数種の追加も
あり, 今回それらの種も加えて本属についてみて見たい。

Pirata 属

本属の特徴として頭胸部背面に Y 状斑が見られることによって, 比
較的容易に属を決定することができる。現在のところ, 14 種が本属に
含まれている。

1. カイゾクコモリグモ 2. キバラコモリグモ, 3. エゾカイゾクコ
モリグモ, 4. ナミコモリグモ, 5. イモコモリグモ, 6. ミナミコモ
リグモ, 7. ハテコモリグモ, 8. クラークコモリグモ, 9. ミズベコ
モリグモ, 10. チビコモリグモ, 11. イリオモテコモリグモ, 12. コ
ガタコモリグモ, 13. アシグロコモリグモ, 14. マルヌマコモリグモ

1. これらの種の形態的特長 (区別点など) や分布について

2 グループに大きく分ける形質として, 前中眼と前側眼の大きさに
注目した。

A : 前中眼 > 前側眼 (1 から 8 の種) (8 種)

B : 前中眼 ≤ 前側眼 (9 から 14 の種) (6 種)

A に含まれる種 (8 種) について

種名	形質及び分布	背甲黒縁 (図 1)	背甲側斑 (図 1)	体長 ♀/♂ (mm)	分布
カイゾクコモリグモ		有	無	6-9/4-6	北海道から本州中部
キバラコモリグモ		有	無	5-8/5-6	日本全土

イモコモリグモ	有	有	4-7/4-5	北海道から鹿児島
ミナミコモリグモ	有	有	5-6/4-5	関東から南西諸島
エゾコモリグモ	無	有	8-10/6-8	北海道のみ
ナミコモリグモ	無	有	5-7/4-5	関東から屋久島
ハテコモリグモ	無	有	4-6/3.5-4	北海道（石川県？）
ミズベコモリグモ	無	有	4-5/3.5-4	北海道のみ

Bに含まれる種（6種）について

種名	形質及び分布	背甲黒縁 (図 1)	背甲側斑 (図 1)	体長 ♀/♂ (mm)	分布
クラークコモリグモ		無	有	5-8/4-6	日本全土
チビコモリグモ		有	無	3-5/3-4	北海道から南西諸島
イリオモテコモリグモ		有	無	3-5/3-4	南西諸島から西表島
コガタコモリグモ		有	有	3-5/3-4	北海道から京都府
アシグロコモリグモ		有	有	4-6/4-5	北海道から山形県
マルヌマコモリグモ		有	有	6-8/4-6	群馬県のみ

II. 各グループ内の種の区別点について

1. Aに含まれる種（8種）について

上記の表中の背甲の特徴により，次の3グループに分けられる。

- ① カイゾクコモリグモとキバラコモリグモ
- ② イモコモリグモとミナミコモリグモ
- ③ エゾコモリグモ，ナミコモリグモ，ハテコモリグモとミズベコモリグモ

*各グループにおける種の区別点

① カイゾクコモリグモとキバラコモリグモ

カイゾクコモリグモ	キバラコモリグモ
胸板に黒斑は見られない(図 2B)	胸板の縁に数個の黒斑が見られる(図 2A)
主として湖等の周辺や小川の縁で見られる	主として水田の畦などで見られる
北方系(北海道では普通，本州では中部まで)	南方系(本州では普通，北海道ではまれ)
雄触肢：中部把持器の先端にこぶ状の突起は見られない(図 3)	雄触肢：中部把持器の先端にこぶ状の突起が見られる(図 4)

② イモコモリグモとミナミコモリグモ

1. 外見は良く似ているため，雌雄の生殖器の形態が必要。ここでは雄触肢の構造を示す。

イモコモリグモ (図 5) ; ミナミコモリグモ (図 6)

2. 分布から，関東以北での場合はイモコモリグモ，逆に鹿児島以南の場合はミナミコモリグモと考えられる。

③ エゾコモリグモ，ナミコモリグモ，ハテコモリグモとミズベコモリグモ

形質	種名			
	ナミコモリ	ハテコモリ	エゾコモリ	ミズベコモリ
環斑の有無	明瞭	無	不明瞭	無
雄第 1 脚附節のカーブの有無	有	有	有	無
分 布	北海道から屋久島	北海道のみ	北海道 (石川県?)	北海道のみ

1. 表中の分布から，北海道以外の場合ナミコモリグモと考えられる。
 2. これら 4 種については，雌の生殖器と雄の触肢の構造による判断が必要。ここでは，4 種の雄触肢の構造を示す。

ナミコモリグモ (図 7) ; ハテコモリグモ (図 8) ; エゾコモリグモ (図 9) ; ミズベコモリグモ (図 10)

2. Bに含まれる種 (6 種) について

上記の表中の背甲の特徴より，次の 3 グループに分けられる。

- ① クラークコモリグモ
- ② チビコモリグモとイリオモテコモリグモ
- ③ コガタコモリグモ，アシグロコモリグモとマルヌマコモリグモ

*各グループにおける種の区別点

①クラークコモリグモ

背甲の側縁部にまだら状に黒斑が見られる (図 1)。雄触肢の構造 (図

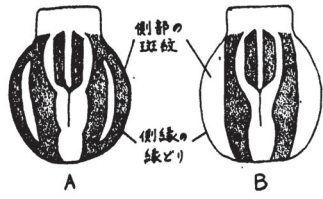


図1. 背甲側部の斑紋と側縁の縁どり (模式図)
 A. 斑紋および縁どりがある場合
 B. 斑紋および縁どりが無い場合

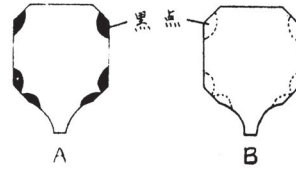
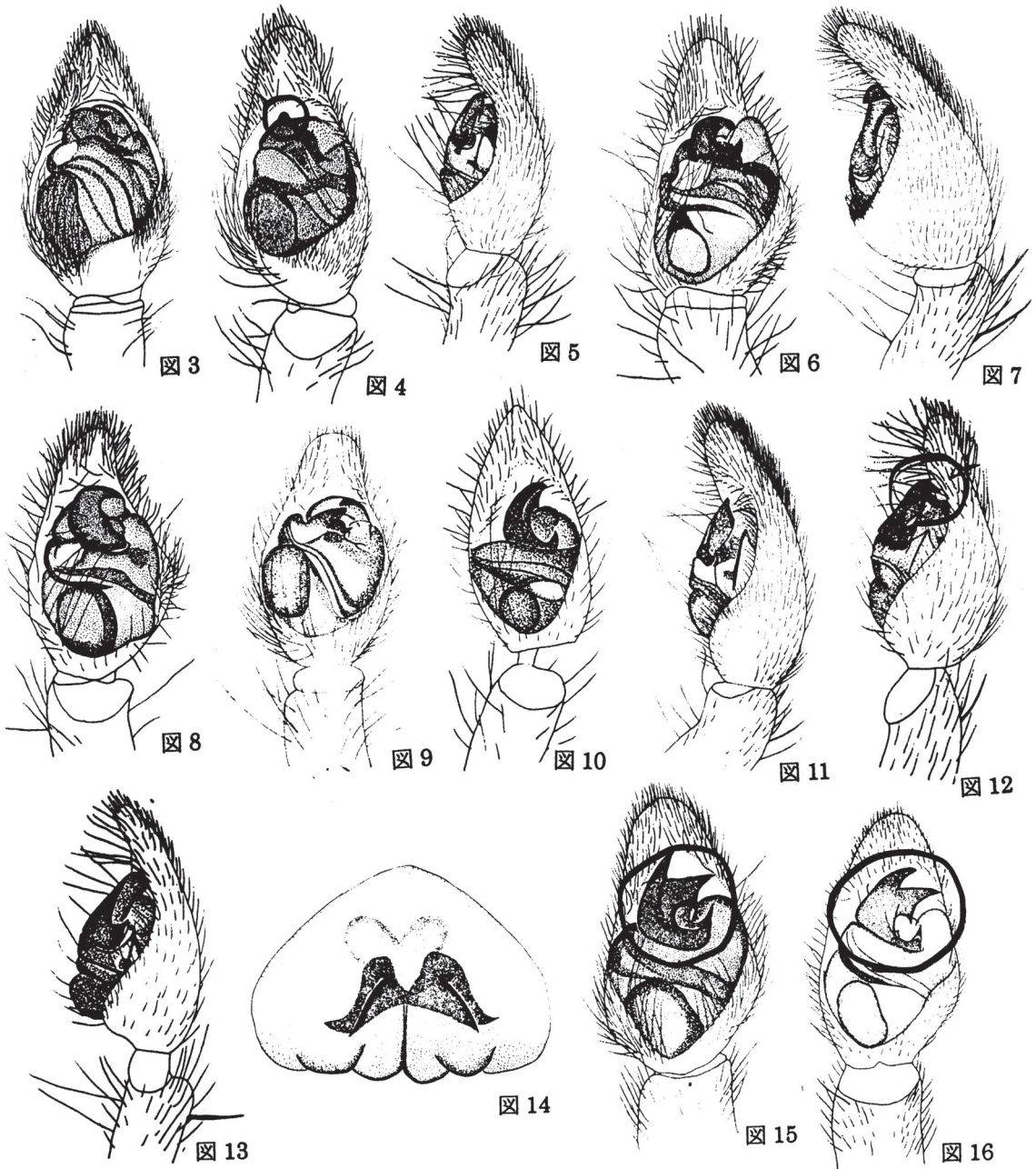


図2. 胸板上の黒点 (模式図)
 A. 黒点をもつ場合
 B. 黒点のない場合



11)。

②チビコモリグモとイリオモテコモリグモ

ともに、体長は小型。分布から、九州より以北での採集ではチビコモリグモ、沖縄以南ではイリオモテコモリグモと考えられる。九州以南で、沖縄までの地域では両種が考えられる。この地域での分布については今後の調査に期待したい。雌は非常に良く似ている。雄の触肢の構造での区別が必要。

チビコモリグモ (図 12), イリオモテコモリグモ (図 13)。

③コガタコモリグモ, アシグロコモリグモとマルヌマコモリグモ

マルヌマコモリグモの分布 (採集地) は非常に特殊で、現在のところ群馬県の丸沼付近でしか採集されていない。本種は山地の溪流の縁に生息する。雌の生殖器の構造が特徴 (図 14)。

コガタコモリグモとアシグロコモリグモの区別点としては、

コガタコモリグモ：雄の第 1 脚腿節が黒色、雌は淡黄色。

アシグロコモリグモ：雌雄共に、第 1 脚膝・脛節が黒色。

両種の生殖器の形態は良く似ている。雄触肢の中部把持器の形態 (山形) に違いが見られる。コガタコモリグモ (図 15) ; アシグロコモリグモ (図 16)。

オオジョロウグモの幼体の不思議な迷網

新海 明

今から四半世紀以前になるが、私はジョロウグモの網に見られる「分枝」や「二分割」糸について、その構造や作成の過程を集中的に調べていた時期があった。そして、この構造がジョロウグモの餌メニューに豊富なバリエーションをもたらしていることもわかったのである。

ジョロウグモの網構造の「分枝」や「二分割」の糸の構造が判明したことで、次に私はオオジョロウグモの網が気になりだした。同じ属でも種が異なれば網構造も違うかも知れない。一方、全く同じ構造であれば、それはそれで興味深い。問題はオオジョロウグモを見るには沖縄まで行かねばならないことだった。

1982年7月。私は意を決して沖縄へと向かった。復帰から10年余り、アメリカの統治下の雰囲気はまだそこかしこに少しずつ残っていたころであった。沖縄の地を踏むまでは、ここに来さえすればオオジョロウグモはいくらでも見いだせると安易に考えていた。しかし、那覇の公園や郊外の家々の軒先などには全くその姿を見いだすことはできなかった。到着した翌日に沖縄在住の下謝名先生の案内で、本島中部にある知花城を訪れて、サトウキビの畑をバックに、悠然と網にとまるオオジョロウグモの姿にやっと出会うことができた。

初めて見たのはオオジョロウグモのメスの成体の網だった。よく観察すると、タテ糸が網の中心から周辺に向かうにつれて枝分かれしていく「分枝」はあったのだが、1本のタテ糸を2本に分けて作られる「二分割」の糸はひとつも見られなかった。やはり、ジョロウグモとオオジョロウグモの網の構造は異なっていたのである。また、三重網と呼ばれる所以（ゆえん）である迷網も、オオジョロウグモのメス成体の網ではあまり発達していなかった。

ジョロウグモの場合でも幼体のときと成体のときでは、その網構造が変化していたので、次の問題はオオジョロウグモの幼体の網構

造だった。外国の文献を読むかぎり、オオジョロウグモの幼体はきわめて特異な迷網をもつというのだ。沖縄の場合ではどうか。興味津々であった。

とはいうものの、当時は高校の教員の身であり、そうおいそれとは沖縄へは行けなかった。会社勤めの方には「教員の特権だよな」といわれる長期の休みを、まずは利用することにした。冬でも暖かい沖縄なので、ひよっとするとオオジョロウグモの幼体が網を張っているのではないかと考え、今度はクリスマスの日沖縄名護市へと入った。ここはヤンバルへの入口にあたり、本島南部に比べ自然がはるかに豊かに残っていた。ジョロウグモの成体はまだまだ盛りといった按配であったが、オオジョロウグモの幼体はひとつも見つけられなかった。

ならば次は春休みである。今度こそと勇んで出掛けたのだが、このときも見つけられなかった。今になって考えれば、春休みには間違いなくオオジョロウグモの幼体はいたはずなのだが、観察のポイントをはずしていたのだ（追記を参照のこと）。その次の夏休みは前年にすでに行っていた。この時期にはもう成体となっていたのだから、幼体を観察するには、春休みと夏休みの間に行くしかない。5月のゴールデンウィークには休めるが、切符の入手がままならない。まだ沖縄便の飛行機は今ほど多くはなかったのだ。仕方なく、土日を利用した1泊2日の沖縄行きに挑戦した。当時は切符代だけでも6万8千円あまりかかり、まわりからはあきれられた。月給の数分の一が吹き飛んだ。けれども、その意気込みの成果はあらわれた。名護城の県道沿いの枯れ枝に造網していたオオジョロウグモの幼体にやっと遭遇したのだ。ものすごく感激したことを今でもありありと思い出す。網構造の調査をする際の私の唯一の秘密兵器である「ラッカースプレー」をその網に噴射すると、そこにくっきりと紡錘形の特異な迷網が浮かび上がったのである（図1）。この時の調査結果は、日本蜘蛛学会の機関誌である *Acta Arachnologica.*, 34(1)に発表してあるので、興味を持たれた方は参照願えれば幸いである。

では、このような幾何学的な網は一体どのように作られるのか。あれからすでに20年以上も経つというのにこの調査をした人は内

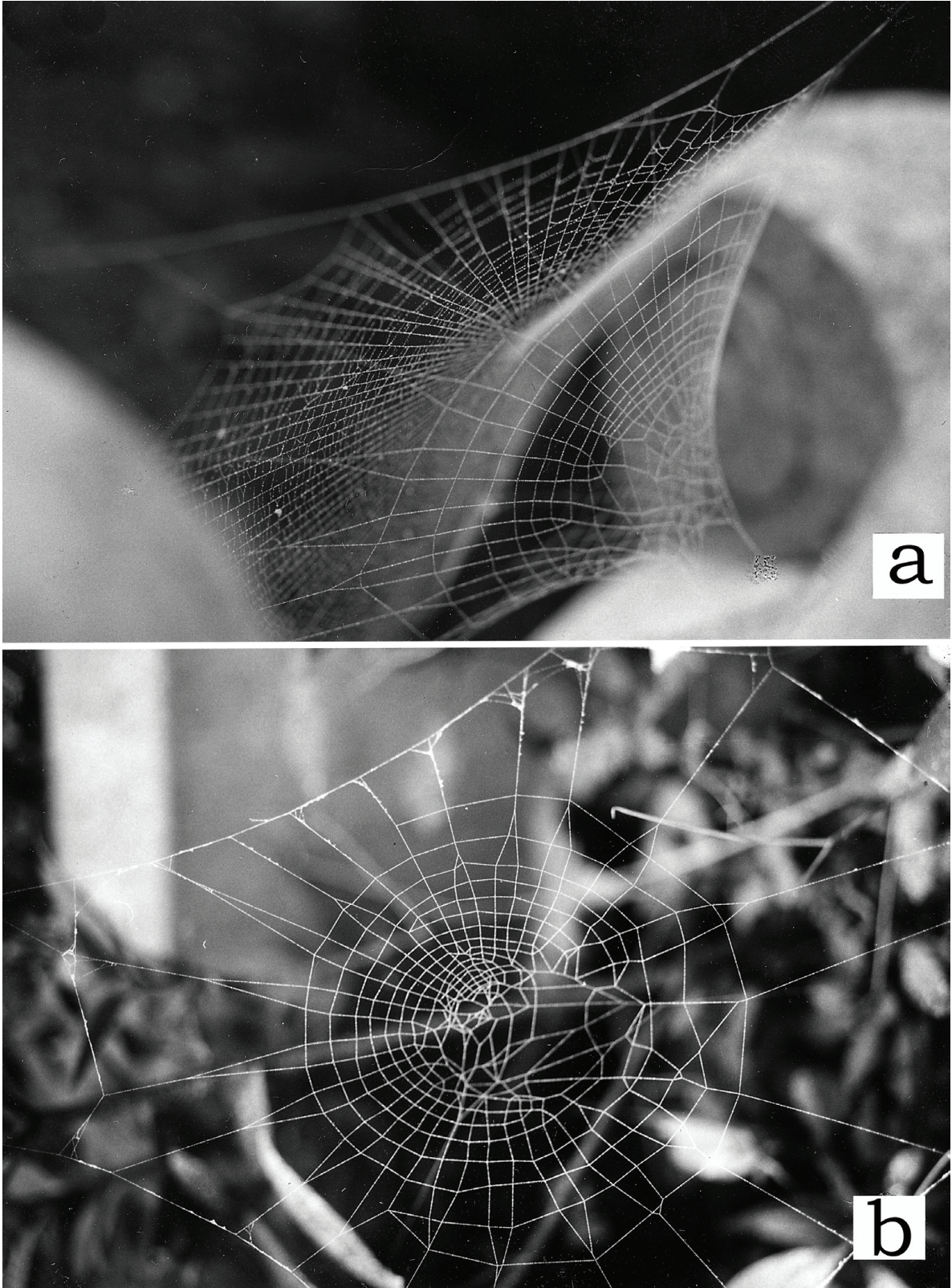


図1. オオジョロウグモの幼体の幾何学的な迷網 a, 側面. b, 正面

外を問わず、現在まで誰一人いないようだ。ここしばらく沖縄には通っていないのだが、訪沖する機会があったらこの謎を解きあかしてみたいと思っているのだが。

(追記)

オオジョロウグモの幼体の多くは、葉の上にその網を作成する。成長するに伴い空間に造網するようになる。この現象に非常に興味を持ち調査したことがあるが、葉上は餌となる昆虫がかなり多く飛来する場所のようだ。

その当時は、あの大きなオオジョロウグモが幼体とはいえ「葉の上」に造網するとは、まったく考えもしなかった。

ウロコアシナガグモの紫外線写真

An ultraviolet image of *Tetragnatha squamata*.

関根 幹夫

Mikio Sekine

I performed exposures in the ultraviolet range of 360 nm. The abdomen of the spider, *Tetragnatha squamata*, reflects the UV light, so we see a vertical line on its abdomen.

Perhaps, it is to attract insects.

ウロコアシナガグモの紫外線撮影を試みた。ウロコアシナガグモの体は可視光線では緑色に見える（図1）。これに対して紫外線撮影では、腹部背面中央に紫外線を反射する1本の縦筋が白く見える（図2）。



図1. 可視光線で撮影した場合.



図2. 紫外線で撮影したウロコアシナガグモ. 背面中央に白い筋が見える.

画像は、コントラストを得るために RGB→BRG と色交換し、次いでグレイスケール化した（福原，2007）。ウロコアシナガグモは、円網を張るが、網を張らずに枝上で近づいて来る昆虫を捕らえることもある（新海，2006）ことから、ウロコアシナガグモは餌昆虫を誘き寄せするために紫外線を反射するのかもしれない。

ほとんど同じ白色に見えるモンシロチョウは、オスよりメスのほうが紫外線を良く反射し、オスがメスを見つけるサインになっているのではないか、というのは有名な話である。また、2007年のサイエンス誌には、ハエトリグモの一種のオスとメスが紫外線と蛍光を利用して互いに相手を認識していることが報告された。（Matthew L.M.Lim et al., 2007）さらには、かくれ帯の役割と紫外線反射の関係は、興味をひく話題である。著者は、クモの紫外線撮影に興味を持ち、今回初めて試みた。

使用機材について：旧製品のデジカメほど紫外線に良く感光する。CCD素子の一眼レフデジタルカメラ・ニコン D70 と UV ニッコール 105mm f4.5 を使用。工業用紫外線透過可視光遮蔽フィルター UL-360（東大阪の OMG 株式会社）と乾電池式ブラックライト PRO-5（横須賀の川島工機株式会社）を使用して撮影した。

参考文献

福原達人，2007．花の簡易デジカメ紫外線写真

http://www.fukuoka-edu.ac.jp/~fukuhara/uvir/hana_uv.html

Matthew L.M. Lim, Michael F. L. and Daiqin Li, 2007. Sex-Specific UV and Fluorescence Signals in Jumping Spiders. Vol.315. No.5811, p.481. Science.

新海栄一，2006．日本のクモ．文一総合出版．東京．

マルゴミグモの観察で分かったこと

船曳 和代

2006年10月3日、姫路ではじめてマルゴミグモを見つけた。場所は姫路駅前のイブキの木の上であった。その後注意してみるとあちこちで見つかった。そのうちの1ヶ所から子グモを採集してきて庭のマサキの上に放し、観察を試みた。その中でいくつか分かったことを報告したい。

私の近辺でマルゴミグモを見つけた場所

- | | |
|----------|------------|
| 1 姫路市駅前町 | 4 姫路市安室 |
| 2 姫路市下手野 | 5 姫路市手柄 |
| 3 姫路市書写 | 6 加古川市東神吉町 |

はじめで見つけたのがイブキの木の上であったので、イブキを注意しながら探したところ私の狭い行動範囲の中で6ヶ所も見つかり、大分前から居ついていると思われる。

産卵について

ご承知のようにマルゴミグモは自身の作った小さな丸い卵のうを、網の上の1本の糸の上に次々と数珠状に付けていく。その卵のうが何日置きくらいに作られるか、安室のイブキの上にいたものを採集し、庭のマサキの上に放して観察した。

1. 2007年4月29日に採集したもの。

3頭が網を張り、その内うち1頭が5月6日に産卵した。その後は10日までに次々と姿を消してしまった。

2. 2007年5月8日に採集したもの。

A-5月19日、24日、27日、6月2日、(*3日に網採集)、8日、16日、7月8日の7回産卵。7月16日いなくなった。

B-5月10日、17日、23日、25日、26日、29日、6月3日、7日の8回産卵。7月17日いなくなった。

3. 2007年9月9日に採集したもの。

9月10日, 14日, 17日, 20日の4回産卵。9月21日いなくなつた。

以上が産卵した4頭についての記録である。短い時には1~3日の間隔で産卵し, 長い時では20日以上開いている。

成体になったクモは越冬できるのか

姫路市安室の兵庫県畜産試験場の周りに植えられたイブキの木の上では, 2006年の秋, マルゴミグモが多数生息していた。そしてこの年から2007年にかけては記録的な暖冬であった。そのせいか卵のうを付けた網の上で越冬するクモが多数見られた。勝手に中へ入ることはできず, 側溝をはさんだ道路から見える範囲で観察した。

12月16日…20頭以上。1月8日…約10頭。28日…数頭。2月10日…数頭。20日…イブキの木が少し剪定してあるが2頭はいた。25日…1頭。4月7日…子グモの網のみ。

このように年を越しても生き残っているクモがいた。しかし春まで生きているクモはいなかった。

網は何時ごろ, どのように壊すか

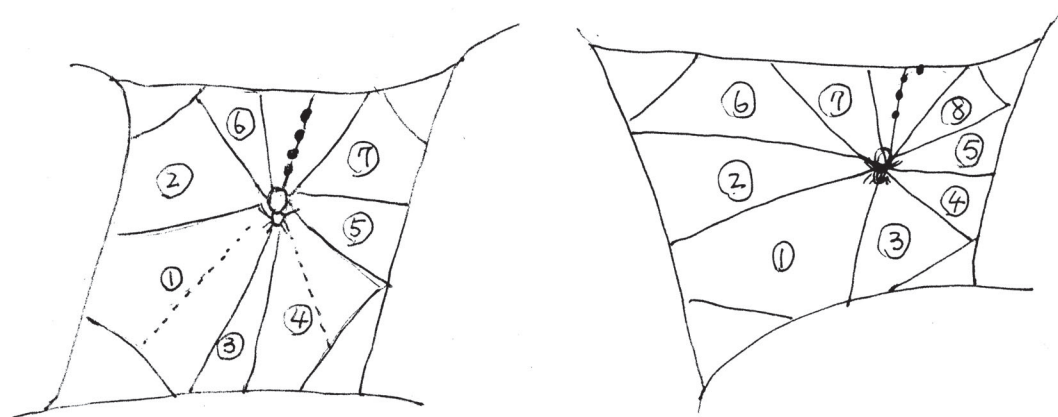
マルゴミグモは毎日網を張りかえるが, 古い網を壊すのは大体10時前後からであった。壊し始めると一気にやってしまう場合もあるが, たいていは一部を壊し, しばらくそのままにしてまた一部を壊し, 最後は一気に壊すというように時間をかけることが多かった。それでもほとんどの場合12時頃までには壊してしまった。

壊し方は中央から外に向かって一定面積の糸を手繰り寄せながら進んで行き, 内枠部分に到達すると内枠糸を切って一気に回収していった。壊していく範囲の順番に法則性があるのかと思ったが現時点では認められなかった。

クモは普段網の上にいるが, 回収する時は網の下側から行なった。エサの捕獲など行動する時は全て網の下側からであった。最初1~2歩は網の上を進むのだけ見ているとバランスがとれないようで危なかつく, すぐにするりと網の下へ移動した。

回収した糸は食わず、捨てたり網糸に付けたりした。

* 網の壊す順序 (いずれも 5月24日の観察例)



姫路におけるこのクモの繁殖期

5月初め頃から卵のうを付けたクモが見られ始め、6月～7月には5個、6個とつけたものが多くなった。そして6月の初めには子グモが出のうし、網を張るのが観察された。9月初めには再び1個の卵のうを付けるものが見られ、その後次々増え10月にかけては数個つけるものが多くなった。確かなことは言えないが、繁殖期は5～6月頃と9～10月頃の2回あるのではないかと考えている。

その他観察したこと

* 他のクモの侵入

マルゴミグモの網にはアシナガグモやジョロウグモの子グモがたびたび侵入し、朝起きて見ると網を乗っ取って真ん中に居座っていることがあった。そんな時マルゴミグモは網の端っこや下に避難していた。私が見つけ次第侵入者を取り除いておくと、また網の中央へ帰ってきた。

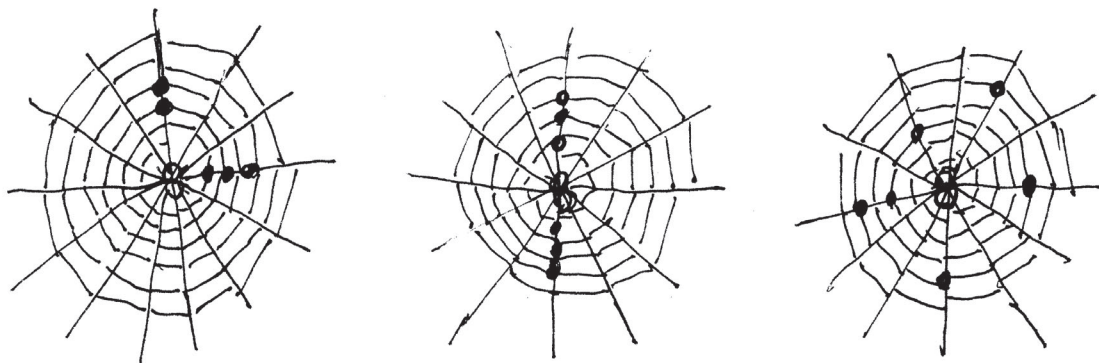
* 卵のうの手入れ

雨後、卵のうに含まれた水を取り除くためか、卵のうに口を付け、吸い取った水を器用に前脚に移し、左右を擦り合わせながらピンピンと弾き飛ばした。これは何度も何度も根気よく繰り返し行なわれた。これ以外にもクモはよく卵のうに触れたり、付けている糸の上

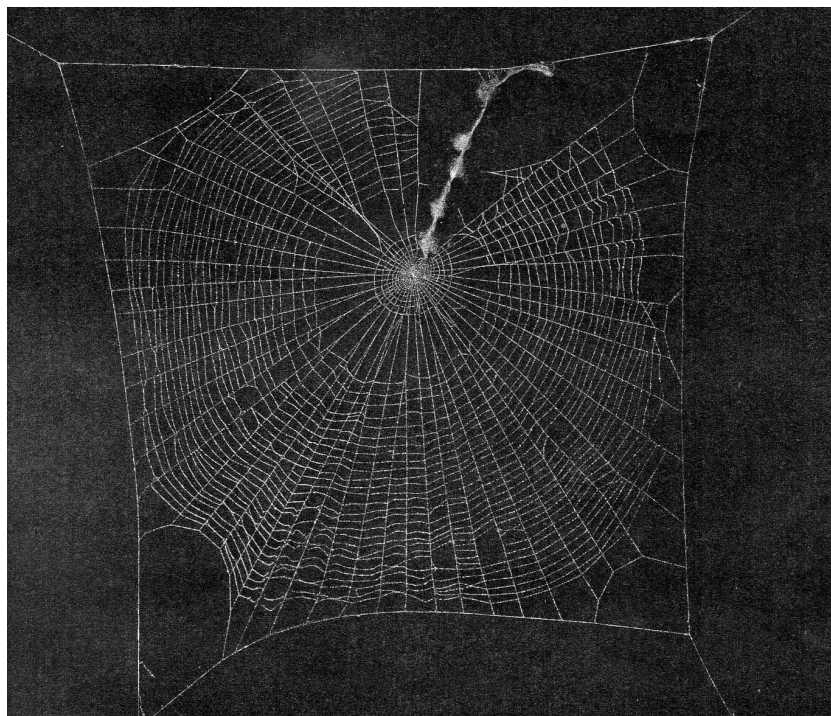
を行ったり来たりする行動が観察された。

* ゴミのつけ方

11月3日子グモの網についてゴミのつけ方を見てみると図のように、たて一直線に並べるもの、時計の短針と長針のように様々な角度で並べるもの、網のあちこちにばら撒くものなどが見られた。



以上が 2006 年から 2007 年にかけて私が観察したことである。今後は繁殖期や全体の卵の数などについてももう少し確かなことを調べて見たい。



2006年6月3日採集した卵のうを付けた網

採集品中に見られたクモ 3 種の奇形

池田 勇介

最近採集したクモの中から奇形のものが見出されたので報告します。採集を手伝ってくれた友人の，神田一将，安井大貴，田中駿吉の各氏に感謝の意を表します。

1) *Plexippoides doenitzi* (Karsch 1879) デーニッツハエトリ ♂ (図 1, 2)

採集日時：2008年5月23日大阪府八尾市恩智中町大畑山アクトランド

池田・田中採集

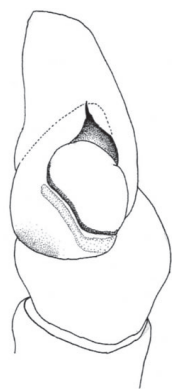


図 1 デーニッツ
ハエトリ奇形雄
左触肢腹面側



図 2 同側面

奇形は右の触肢先端部に見られ，正常な雄の生殖器とは顕著に異なっている。胚葉凹部を欠き，生殖球著しく縮小し，胚葉と融合する。栓子は痕跡的でわずかに黒い筋状の構造物として見とめられるだけである。脛節突起

を欠き，胚葉が通常では楕円形で在るのに対し，卵形を呈する。毛の本数は正常なものとは比べて明らかに少ない。左の触肢の形状は正常。奇形の原因は不明。

2) *Acusilas coccineus* Simon 1895 ハツリグモ ♂ (図 3)

採集日時：2008年6月14日大阪府箕面市箕面国定公園 池田勇介採集

奇形は前種と同様の部位にみられる。末端は構造そのものが見られず，亜成体の触肢と完全に一致。脛節にも異常をきたしており，1対の突起物が下方へと伸び，節全体が著しく黒化している。通常の個体ではこのようなものはみられない。左の触肢の形状は正常。何らの原因で



図 3 ハツリグモ奇形
雄左触肢腹面側

幼体の段階で触肢が欠損し，不完全な形で再生したものと推測される。

3) *Tetragnatha praedonia* L. Koch 1878 アシナガグモ ♀ (図 4)

採集日時：2008年6月14日大阪府箕面市箕面国定公園 池田勇介採集



図 4 アシナガグモ奇形
雌左上顎上面

奇形は左側の牙に見られる。牙は強く湾曲し，輪を描く。右の牙は正常。おそらく脱皮の途中あるいはその直後に何らかの原因で牙が曲がり，そのまま固定されたものと推測される。

参考文献

- 大志茂善平 1953. 蜘蛛の奇形数例. *Atypus*, 4:7-8.
八木沼健夫 1966. クモの奇形 3種. *Acta Arachnol.*, 20:21-23
吉倉 真 1987. クモの生物学. 613p. 学会出版センター

ライバルよ頑張れ！

池田 幸二

蝉の鳴き声で目が覚めた勇介 3歳の夏。休日になると家の向かいの大阪府藤井寺市津堂城山古墳に出かけ蝉採りに行った。ほとんどがアブラゼミにクマゼミ。当時わが家でのプチブームは夕方に幼虫を自宅に持ちかえり，カーテンに引っ掛けて羽化の様子を観察することであった。「図鑑と一緒にや！」「きれいやな！」蝉の前から離れようとしないう勇介を見た私もいつしか子供にかえっていた。夏も終わり秋も深ま

り、そろそろ冬になろうかと思う頃「蟬採りに行こうよ！」「勇介、蟬は夏の生き物、来年の夏や！」悲しそうな顔をしていたため、いつもの古墳へと出かけた。蟬はもちろんバツさえもない状況。しかたなく小石やブロックをひっくり返しミミズやワラジムシにダンゴムシを眺めることにした。しばらくすると勇介が固まっていた。「これなに？」「クモや！」。これが初めての出会いであった。生まれて初めて見たものには何の先入観もなく、気持ち悪いどころか、むしろ彼には一番かっこよく映ったのであろう。私から見ればクワガタムシにカブトムシの方がはるかにかっこいいはずだが、彼はそうではなかったようだ。

以来親子の格闘が始まった。クモを育てたことがない母にどちらかと言えば気持ち悪いと思う父、新たなる生活のリズムにクモが加わったのはこの頃だった。何もわからない家内はまず本を探すことから始めた。近くの大阪府藤井寺市立図書館へ出かけ本を検索、ほとんどのものは勇介が生まれる前から借りられたことがないものばかり。「やはり脚光を浴びない生き物。しかしながら借り手がいない、ということはこれら全て池田家の本・・・ありがたい！」。普通、子供を寝かせつける時には童話などを読み聞かせるものだが、フィールド図鑑クモと学研クモ図鑑が定番であった。あお向けで図鑑を持つ私の両手はその重さで震えていた。家内はそうでもなかったようである。なにしろたくましい。三段腹の徴候はこのころからあったようである。

5歳の春、幼稚園に入園。園内の自由時間はブランコなどの遊戯設備で遊ぶものだが、当然彼はクモ採りである。園長先生に言われた「勇介くんは何時もかがんで遊んでいる！」登園時は幼稚園までは10分もかからない。しかし帰宅には30分もかかる、しかも両手は握り拳で帰宅、当然手の中にはクモ。見かねた家内はビニール袋を持たせることにした。買い物も同様であった。なかなかスーパーへたどり着かない、買い物と採集はセットになっていたようだ。この頃になると藤井寺市立図書館の本では物足りなくなり近隣の八尾市・羽曳野市の本をローテーションで借りることにした。ここでも借り手は全て池田家であった。

本だけの知識では限界を感じた家内は一時クモを諦めさせようと考

えたらしい。そんなとき「大阪市立自然史博物館友の会」の存在を知り早速入会手続きをした。博物館のイベント「靱公園のセミのぬげがら調べ」に参加。抜け殻を調べない彼、当然ここでもクモ採りである。一緒にいた友の会評議員の山本博子さんが「ぼく、そんなにクモが好きならクモの先生を紹介するよ！」ここで運命の出会いがあった。西川喜朗先生との出会いである。私は思った「助かった！」「先生に全てを預けよう！」私達夫婦にとっては先生が天使に見えた。今から思うと妻の選択も然ることながら、山本さんに深く感謝いたします。ありがとうございました。

後日、関西クモ研究会採集会案内の葉書が西川先生から届いた。やはり天使であった。朝早く姫路に向かい待ち合わせの姫路科学館に着いた。挨拶もそこそこにクモ採りが始まった。私は思った。「変な人達だ！」クモを眺めては「綺麗！かっこいい！」「そのクモ見せて！」「そのクモちょうだい！」この人達はよっぽどクモ好きなんだろう。おそらく勇介がいなければこんな光景に出会うことは私の人生にはなかったであろう。当の本人といえば狂喜乱舞である。船曳和代先生にコゲチャオニグモをおねだりしたり、ハンゲツオスナキグモを西川先生と一緒に採取したりと、変な人達の仲間入りができたようだ。

6歳の誕生日プレゼントを買いに本屋へ出かけ、千国安之輔先生の写真日本クモ類大図鑑を注文したが店員さんに「本当にこの本でよろしいですか？」と確認された。確かに29,800円もする本だが、内心失礼な店員だなと思った。勇介が注文主なので仕方ないか。この頃になると飼育するクモも増え、家内は大忙しである。家の外に布団を干しに行く。家内の両手には布団と虫取り網。干し場には柿ノ木とみかんの木があり、餌となる蛾や蝶を捕獲するためであった。この年の暮れ、関西クモ研究会の例会に初めて参加。年2回の採集会は池田家の年間行事となった。

その後勇介は色々な会に入会しクモ一直線であるが私はどうであろうとふと考えた。吉田真先生の関西クモゼミでは料理人？関西クモ研例会の宴会と東京蜘蛛談話会合宿の宴会も大好き……。クモより宴会が好きな私ではあるが、ある日勇介が言った「お父さんはハンターの素質がある！」。誉められるとたとえ子供からでも嬉しいものだ……。

確かに自分が採ったクモが勇介から見れば島根県新記録だとか、四国新記録だとからしいが、今一つピンとこない。それもそのはず、未だにコシロカネグモとオオシロカネグモの区別がつかない。全てのクモは糸を出すことをつい最近知った！・・・。しかしながら 2006. 8. 12 クモゼミ合宿の奈良県吉野郡上北山村西原和佐又山夜間採集会の時ばかりは興奮した。和佐又谷の川のほとりにある桜の木に円網があった。真ん中にクモ！

山側で採取している勇介に報告に行く父。

父：「ゆ・ゆ・ゆうすけ～！コケ・コケ・コケオニグモや！！！」

勇介：「オニグモの色彩変異やろ！」

父：「そやけど緑色してるで！」

勇介：「それを色彩変異って言うねん！」

父：「いやコケや！ほんまにコケオニグモなんや見てみ！」

駆け寄る勇介。

勇介：「ほんまや！」

わたしにも同定ができた。しかも珍種である。「お父さんにはしばらく勝てない」と言わしめた快心の一打であった。「超うれしい！」。さらに今年、2008. 8. 14 和歌山県日高郡日高川町山野大滝川森林公園でまたも珍種を発見してしまった。一瞬目を疑った。次に手が震えた。絶対に逃がしてはならぬ。失敗は永遠の汚点になる。一度捕獲に失敗し、地面を這う彼女を丁寧にビンに収めた。カトウツケオグモであった。ここでも私は心の中で叫んでしまった。「なんも言えないス！」。カトウさんを見せつけられたライバルは、ワクド探しに勝機を見出そうとするが不発に終わった。私だけが勇介をライバルと思い込んでいるらしい。彼は冷静だった。どうやらいつの間にか私もクモの糸にからまったようだ！おっさんではあるが初心者である。ライバルはどうでもよい、これからは私がお世話になります。

ライバル??? おっさんこそ頑張れ!

池田 勇介

ライバル (名) [rival] ①競争相手。好敵手 (三省堂国語事典第四判より)。父は言葉の意味を理解していないらしい。

母が言っていた。お父さんはよく寝かしつけるためにクモの本を読んでくれていたそうであるが、一番先に寝ていたのはお父さん。最近はずっとすごい、信じられないが3秒で寝ることさえあった。しかたなく母が本を読んでいたようである。たくましくさせたのはやはり父であった。

そんな父ではあるが私の最大のスポンサーである。これからもがんばってね!

今年も色々なところに採集に出かけたが、ライバル??? (おっさん) がカトウツケオグモを採取した大滝川森林公園で採集したクモを報告します (27 ページ参照)。

書評 クモの網—What a wonderful web! (INAX 出版)

思わず息を呑む美しさ。藍色の背景に白い網が浮き出して見える。図鑑などにはクモの網の写真がしばしば載っており、クモの網について書かれた本もいくつかあるが、網の美しさを伝えるという点では、船曳和代さんの網標本の写真が満載されたこの本が最高である。もっと言えば、他の追随を許さない傑作である。

丸く平面的な、おなじみの円網だけではない。ページをめくると、お椀を伏せたような皿網、破れた網タイツのようなボロ網、南米のアマゾン源流で見つかったハシゴ網など、一般の人にはあまり知られていない網が次々と現れる。クモ愛好者には周知のことだが、船曳さんは、ラッカースプレーで白く着色したクモの網を藍色の台紙に貼り付けて、「網の標本」にしたのである。

これを見ると、網の構造が細かいところまで良く分かる。普通の円網では、隣り合う二本の縦糸の間隔は網の中心部ほど狭く、外側に行

くほど広くなる。ところが、ジョロウグモの網では、縦糸の間隔は網の外側でもあまり広くない。これは、網の外側では、分枝や分岐によってジョロウグモが縦糸を増やしているからである（新海，1984）。また、一見するとユノハマサラグモの皿網と同じように見えるスズミグモの網は、四角いメッシュ構造を持つことから、サラグモ科の網とはまったく異なることが分かる。その意味で、これは「網の標本」を集めた世界で最初の本と言ってもよい。

この本は、網の観察や研究に役立つだけではない。それは、クモの網が繊細で美しい工芸品であることを如実に示している。クモが嫌いな人でも、これを見れば「とても美しい」と感動するに違いない。僕は、船曳さんの「網の標本」を **Web Art** と呼んでいる。この呼び方には異論もある。この **Art** を作った **Artist** はクモであって、船曳さんではないというのである。それはもちろんその通りだが、クモの網の美しさをこれほど際立たせたのは船曳さんである。藍色の背景に白い網を浮かび上がらせたセンスの良さ、サラグモなどの立体的な網を平面に貼り付けてしかもそれらを立体的に見せるなどという芸当などは、凡人ができることではない。その意味で僕は、これを **Web Art** と呼ぶのである。

この本の主役は船曳さんの「網の標本」であるが、脇役は可愛らしく描かれたクモのイラストであり、クモ嫌いの人でも読めるような工夫がされている。また、クモの網の秘密をより詳しく知りたい人のために、あちこちに新海明さんの解説がちりばめられている。

これは、大阪・名古屋・東京の **INAX** ギャラリーで開催された「クモの網展－What a wonderful web!」に併せて **INAX** が作った本であるが、クモ屋が書いた本とはまた別の味があり、とても興味深く読ませていただいた。

長野のサカグチトリノフンダマシ

小池 直樹

2006 年の個人的ビッグイベントを報告するのを忘れてました。危ない危ない。

この年の 8 月 16 日、長野県中条村の車道沿いの草むらでサカグチトリノフンダマシを発見いたしました。彼女は水平に円網を張り、その真ん中にぶら下がっています。僕が近づいても堂々と鎮座したままなので、それを舐めるようにじっくりと鑑賞した後、ぽいっとアルコール瓶に放り込みました。愚かしくもそのときカメラを持っていなかったため、写真はございません。

同じ網にいたトリフン系のオスとボカシミジングモも合わせて液殺致しました。オス、こいつはもしや、と僕は勝手に興奮し、持って帰って立命館クモゼミのみなさんにも一緒に興奮していただいたのですが、東京の谷川明男先生によりオオトリノフンダマシのオスであるとの通告がなされました。ああ、残念。谷川さん、同定ありがとうございました。

標本にせしめた成体♀のサカグチさんは東京の国立科学博物館収蔵と相成りました。僕の手元にあるより幸せな死体のあり方、でありましょう。ですがしかし、再び生きている彼女と出会うことがあったなら！ 今度は手放したりしませんよ、僕は。

ちなみに、これが長野県初記録ということになるようです。

樹の上のワスレナグモ

荒川 真子

2007 年 8 月 30 日に、大阪府吹田市山田丘にてワスレナグモの幼体を採取したので、その際の状況を報告する。場所は大阪大学吹田キャンパス内の、ツツジの植え込みである。この植え込みには、夏にはクサグモのものと思われる多くの棚網が見られる。ところがこの日は、

棚網の一つに近い葉の上に、薄く粗いシート様に張られた糸を見つけた。一本の枝の先の、数枚の葉をつなぐ程度の小さなシートである。この上を、幼体が歩いていたのだ。記録には残していないが、5・6個体がいたように記憶している。採取時にはクサグモかと考えたのだが、体色が赤くないことと顎が大きいことから、加村隆英教授に同定していただき、ワスレナグモだと判明した次第だ。

問題のシートは、探す場所を間違えたのか、翌日には見当たらなかった。次の夏にはもう一度、成体も含めて探したいものだと考えている。末筆ながら、同定をしてくださった加村教授と、この報告を書くよう勧めてくださった吉田真教授に感謝を申し上げる。

関西クモ研究会 2007 年度会計報告

収入：2006 年度からの繰越金	193,822
会費過年度分入金	8,000
会費 2007 年度分入金	20,000
会費 2007 年度前受け分繰り入れ	38,000
バックナンバー売り上げ	4,500
寄付	1,000

=====
合計 265,322

支出：くものいと No. 40	表紙用紙	2,600
同上	印刷費	27,000
同上	裁断料	1,300
同上	郵送用封筒	525
同上	郵送費	17,000
採集会・例会の案内はがき郵送費		12,750
その他の郵送費		3,210
2008 年度への繰越		200,937

=====
合計 265,322

会費前受け状況 2007 年度末における会費前受け分の合計は、

73,000 円である。その内訳は次のとおり。2008 年度分, 36,000 円 ; 2009 年度分, 16,000 円 ; 2010 年度分, 9,000 円 ; 2011 年度分, 5,000 円 ; 2012 年度分, 2,000 円 ; 2013 年度から 2017 年度まで各 1,000 円。

寄付拝受 会員の小川光昭氏から寄付として 1,000 円を頂戴いただきました。厚くお礼申し上げます。

上記のとおり, 報告します。

会計担当 加村隆英

会計監査報告

会計に関する書類を監査した結果, 正確に処理されていることを認めます。 2008 年 4 月 26 日 会計監査 船曳和代

関西クモ研究会 2007 年度例会の記録

2007 年 12 月 23 日 (日) に四天王寺高等学校 (大阪市天王寺区) で 2007 年度の例会が開催された。

役員会

例会に先立って, 役員会が開かれた。出席者: 田中穂積 (会長), 山野忠清 (庶務), 加村隆英 (会計), 西川喜朗 (顧問), 船曳和代 (会計監査)。

(1) 2008 年度の行事予定

- ・採集会: 2008 年 5 月 25 日 (日) および 2008 年 9 月 28 日 (日), いずれも淀川河川敷を予定。
- ・例会: 2008 年 12 月 21 日 (日), 場所は四天王寺高等学校を予定。

(2) 「くものいと」の発行

40 号を 2007 年 6 月に発行した。41 号をできるだけ早く発行したい。

(3) 会員数報告

現在の会員数は 86 名。

例会

出席者: 浅川 正, 井倉潤也, 池田幸二, 池田勇介, 池田亮太, 大原 結, 加村隆英, 黒田あき, 小池直樹, 坂口佳史, 座古禎三, 清水裕行, 新海 明, 関根幹夫, 高橋麻希, 田中穂積, 谷川明男, 長崎緑子, 西川喜朗, 西本 裕, 野嶋宏一, 原口 岳, 船曳和代, 山田廣士, 山野忠清 (計 25 名)。

講演発表

- (1) 関根幹夫: クモの紫外線画像
- (2) 新海 明: 絡新婦はジョロウグモなのか — 江戸時代のクモ, その新たな見方
- (3) 谷川明男: ベネズエラ クモ紀行
- (4) 清水裕行: 兵庫県のクモ & ゴケグモの話
- (5) 加村隆英: 大阪城公園のクモ類

講演の合間に, 役員会で審議・報告した内容を出席者に紹介し, 了承を得た。

近況報告

●谷川明男

これまではアシナガグモ科やコガネグモ科といった大型の円網グモを対象にして研究してきましたが, ここ数年はキムラグモ類・トタテグモ類の分布や系統関係に興味を持って調べるようになりました。どんなことでも同じだとは思いますが, 調べれば調べるほど新しい疑問が湧きだして, もはや一生をかけて調べていこうと思っています。

●原口岳 (京大・農・4 回生)

現在, 卒論の追い込み中です。苦しみつつ楽しみつつ, クモと向き合っているといったところでしょうか。おひろめは来年 (2008 年) の土壤動物学会となる予定です。沖縄大会ですので, 皆様採集がてらお立ち寄り下されれば幸いに存じます。

●小池直樹（京大・農・4回生）

この頃、毎週のようにサークルの後輩といっしょにクモ採集&同定会をやっています。みんな顕微鏡をのぞいて、「うう〜」。むずかしい。

●池田幸二

クモの知識は全くないけど、ハンターの素質は十分？ 打倒「勇介」・・・父より

●池田亮太

現在、クモを勉強中です。同定の仕方やつかまえ方がわからないのでおしえてください。

●西川喜朗

今年は、大阪城公園の生物調査に明け暮れました。木や林があっても、下草が少なく、落葉そうじが徹底しているので、クモや昆虫が少ないです。しかし、毎月調査をおこなっていると、それなりに興味あることも見つかりました。

●坂口佳史

大阪の保健所に勤めている坂口です。クモとの関わりはセアカゴケグモの啓発活動をしていることです。来年3月末で定年退職ですが、老後も「クモの糸にすがって生きていけたらなあ」と思っております。よろしくお願ひします。

●関根幹夫

昨夏、ボルネオを訪れました。とっても近くに野生のオランウータンやヒョケザルを見られて、もちろんクモも追いかけてましたが・・・嬉しかったです。HPにアクセスしてみてください。

<http://www.cyberoz.net/city/sekine/BORNEO01.htm>

●長崎緑子（朝日新聞大阪本社・科学医療グループ記者）

2007年5月10日付けで、大阪に来ました。今、医療記事を主に書いています。大阪は出身地の岡山に近いものの、住むのは初めてです。

大学では 2001 年度まで、ヒメグモ科の子育てを研究していました。その後、朝日新聞に入社し、秋田県と熊本県に赴任しました。秋田では福島彬人さん、熊本では入江照雄さんと、赴任先に必ずクモ屋が一人はいるので心強かったです。大阪では、関西クモ研究会が、活発に活動されているので、もっと心強く思っています。大学時代、東京で見る機会がなかったオダカグモを捕まえてみたいです。

●黒田あき

クモに出会った頃はクモだけしか見えなかったけれど、4年たつと、余裕が出てきて他の虫も見えてきました。けれど、どんな虫もスゴく魅力的なのに、クモより詳しく知っている虫はありません。その事に気付いた1年でした。採集して帰ると、虫に詳しい息子が図鑑を広げて丁寧に教えてくれます。が、息子は『珍しい虫が欲しいと思う自分がイヤだ。それで命を奪うのは間違い』と言い、採集はしなくなっています。そういう気持ちが養われた事は、虫との関わりがあったからこそだと思います。多様で多彩な先輩と先生に囲まれて今は幸せです。命を無駄にしないよう関わっていきたいと思います。

編集後記

約1年半ぶりでくものいと 41号をお届けします。僕がなかなか編集をできないのを見かね、忙しいのに、谷川明男さんが編集を引き受けてくれました。感謝感激です。

次の号は谷川さんの助けを借りなくとも、関西メンバーで何とか発行したいと思っていますので、関西在住の方、ご協力ください。なるべく早く 42号を発行したいと思っています。

<関西クモ研究会>

会長 田中穂積

編集 吉田 真

庶務 山野忠清

会計・名簿管理 加村隆英

会計監査 船曳和代

顧問 西川喜朗

くものいと 41号

発行 2008年11月23日

関西クモ研究会（代表：田中 穂積）

事務局（担当：加村 隆英）

567-8502 大阪府茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学 生物学研究室